

1900年代から1920年代における文化的シオニズムのアメリカ化 —アハッド・ハアム受容のプリズムとしてのマグネス、カプラン、カレン—

石黒 安里

同志社大学研究開発推進機構特別任用助教

要旨

本稿は、1900年代から1920年代におけるアメリカのシオニストらがシオニズム運動を通して、アメリカ・ユダヤ人としてのアイデンティティ形成にいかに対峙したかを考察するものである。具体的には、文化的シオニズムの提唱者として知られるアハッド・ハアム(Ahad Ha'am, 1856-1927)のシオニズムとユダヤ教に関する理念がアメリカ・シオニズムへ受容されていった過程を概観する。また、アメリカ・ユダヤ人共同体はアメリカ社会への同化を目指していたことに加え、世俗化の波にさらされることで、異なる文化的背景が存立する状況下においてアイデンティティ・クライシスに直面していた。このような状況の中でアメリカ・シオニストらは、この問題の解決をシオニズム運動のなかに見出そうとしていたことに関しても取り上げる。本稿では、アハッド・ハアムのシオニズム思想に影響を受けた三人の人物に焦点を当てる。初期のアメリカ・シオニズム指導者の一人、ユダ・L・マグネス(Judah L. Magnes, 1877-1948)、および再建派ユダヤ教の提唱者である、モルデカイ・M・カプラン(Mordecai M. Kaplan, 1881-1983)、さらに、文化多元主義の提唱者であるホレス・M・カレン(Horace M. Kallen, 1882-1974)らのユダヤ教の捉え方、および「文化」、「ユダヤ教」(Judaism)の用語を手がかりに、アメリカ化された文化的シオニズムの特徴を浮き彫りにする。

キーワード

アハッド・ハアム、ユダ・L・マグネス、モルデカイ・M・カプラン、ホレス・M・カレン、文化的シオニズム

Americanized Cultural Zionism from the 1900s to the 1920s: Reflecting the Prism of Aḥad Ha'am's Thought—Magnes, Kaplan, Kallen

Anri Ishiguro

Assistant Professor

Organization for Research Initiatives and Development, Doshisha University

Abstract:

This paper examines how American Zionists faced the problem of constructing an American Jewish identity through Zionist activity from the 1900s to the 1920s. In particular, I focus on the historical background of how American Zionism inherited its ideals of Zionism and Judaism from Aḥad Ha'am, who was known as an advocate of Cultural Zionism. Moreover, this paper discusses the factors involved in American Zionist attempts to find a solution to the identity crisis in American Jewish society and in Jewish assimilation into mainstream US society.

By focusing on three personalities who were influenced by the Cultural Zionist ideals of Aḥad Ha'am, I identify the features of Americanized Zionism in terms of its approach to the concepts of “culture” and “Judaism”. In particular, I focus on Judah L. Magnes (1877–1948), a leader of the American Zionists, Mordecai M. Kaplan (1881–1983), an advocate of Reconstructionism, and Horace M. Kallen (1882–1974), an advocate of multiculturalism.

Keywords:

Aḥad Ha'am, Judah L. Magnes, Mordecai M. Kaplan, Horace M. Kallen, Cultural Zionism

1. はじめに

ユダヤ人の視点から、アメリカ・ユダヤ史を振り返った場合、1900年代から1920年代にかけては、ユダヤ教の在り方がより多元化し、新たにアメリカ・ユダヤ人としてのアイデンティティを形成する必要に迫られた時代であったと言えるだろう¹。その理由の一つは、19世紀後半以降に二つの異なる文化的・宗教的背景をもったユダヤ移民が、それぞれアメリカ社会への同化を目指していたことに拠る。アメリカを「新世界」として目指してきたユダヤ移民の第一波は、1848年に生じ、その移民の構成要素が主にドイツ語圏からのユダヤ人であったことから、「ドイツ系」と呼ばれた²。また、ロシア系ユダヤ人からなる第二波は非常に大規模なものであった。経済的理由から新天地を求めて、あるいは1881年にウクライナを起点に、断続的に生じたポグロムから逃れるためアメリカへやって来たロシア系ユダヤ移民の数は、1924年に移民制限法が発行されるまでにおよそ200万人にのぼった。従来の研究では、先にアメリカへ移住し、ある程度アメリカ社会への参入に成功していたドイツ系と、経済的な理由やポグロムにより主に1880年代以降、アメリカへとやってきた東欧系とのあいだには大きな隔たりがあったと理解されてきた。この二つの集団は話す言語が異なるほか、経済的格差、居住区域、その生活習慣（宗教的慣習に対する実践の度合い）の異なりにより分断されていた³。このように19世紀後半以降のアメリカ・ユダヤ人を取り巻いた状況は多元的であり、ユダヤ人共同体としてもけっして一枚岩ではなかったが、アメリカにおけるユダヤ教の展開を概観すると、それぞれの時代のラビたちが、ユダヤ性を捨て去ることなくアメリカ社会へ順応できるよう、アメリカの土地にちなんだ「ユダヤ教」の形成を試みてきた⁴。ジョナサン・サルナ(Jonathan D. Sarna)は19世紀はアメリカのユダヤ人共同体において、一種の「ユダヤ教覚醒」の時期であったと主張している⁵。

本稿では、出身地および宗教的背景の異なるユダヤ系の人々がアメリカ社会に根差した「ユダヤ教」の形成を図り、シオニズム思想とユダヤ教を結びつけることで、アメリカ社会に適応可能なユダヤ・アイデンティティを形成しようとした試みを概観する。具体的には、アハッド・ハアム(Aḥad Ha'am, 1856-1927)のシオニズム思想に影響を受けた以下の三人の人物、ユダ・L・マグネス(Judah L. Magnes, 1877-1948)、モルデカイ・M・カプラン(Mordecai M. Kaplan, 1881-1983)、ホレス・M・カレン(Horace M. Kallen, 1882-1974)を取り上げる。彼らのユダヤ教との距離、および「文化」、「ユダヤ教(Judaism)」の用語を手がかりに、アメリカ化された文化的シオニズムの特徴を浮き彫りにすることで、シオニズム思想の中にユダヤ・アイデンティティ維持の拠り所を見出したことを明らかにする。また、それらの取り組みが、アハッド・ハアムの提唱した文化的シオニズムのアメリカ化であっ

たことを検討する。

2. アハッド・ハアムの文化的シオニズム

2-1. シオニズムとユダヤ教との関係

まず、アハッド・ハアムにおけるシオニズムとユダヤ教との関係性を概観する。1856年生まれのアハッド・ハアムはウクライナのキエフ地方スキヴィラ出身で、文化的シオニズムの提唱者として知られる人物である⁶。では文化的シオニズムとは何か。サイモン・ノベック(Simon Novak)はアハッド・ハアムのシオニズムの特徴を以下のように簡潔に定義している。

〔テオドール・〕ヘルツェル〔原文ママ〕⁷はユダヤ人国家を可能にするヴィジョンをもった偉大な政治的指導者であったが、アハッド・ハアム〔原文ママ〕は近代世界においてユダヤ教が直面する危機を分析し、シオニズム運動のために理論的基礎を与えた哲学者であり、教師だった。パレスチナは単にユダヤ人の経済的保証を解決し、あるいは反セム主義の問題を和らげるために建設されるのではなく、ディアスポラにおけるユダヤ人の生き方を蘇らせる精神的センターとして貢献すべきだという彼の中心的理念は、ヘルツェルの強調する政治的・外交的解決の立場と均衡を保った⁸。

ヘルツェルは反ユダヤ主義から同胞のユダヤ人を救うために、外交交渉を用いて、ユダヤ人国家の建設を目指す政治的シオニズムを主張した。一方、アハッド・ハアムは政治的な関心からシオニズム思想を展開したのではなく、当時のユダヤ教が解体の危機にあった現状を憂い、ユダヤ人の精神的センターをパレスチナに建設することが重要であると主張した。事実、ヘルツェルのシオニズムの動機は同胞のユダヤ人を救済することにあつたため、彼自身はパレスチナに移住することはなかった。他方、アハッド・ハアムはパレスチナでユダヤ的な文化を开花させることが、「ユダヤ教」の存続を保持するものであると主張したことから、1921年末にパレスチナへ渡っている⁹。しかし、同胞のユダヤ人が大量にパレスチナへ移住することは彼のシオニズム思想における関心事ではなかった¹⁰。

アハッド・ハアムは、レオン・ピンスケル(Leon Pinsker)の没後10年の際に述べた原稿、*Pinsker and Political Zionism* (1902)の中で、政治的シオニズムについて以下のように述べている。

仮に私が宗教から描写するならば、ピンスケルは政治的シオニズムの福音の

最初の人物であった。そして、ヘルツルはその〔政治的シオニズムの〕使徒である。〔…〕しかし、ヘルツルは彼の職(*métier*)であるところの実践的な使命に満足することはなかつたろう。〔…〕福音は述べ伝えられたが、その真の元祖は忘れ去られてしまう。〔…〕シオニズムは他の信仰があるのと同様に、一つの信仰(a faith)である。それ〔シオニズム〕は聖典(“Bible”)を権威とし、〔…〕彼らの霊的な源泉となる。この新しいシオニズムの〔現象〕とともにヘルツルの影響は偉大であるが、彼〔ヘルツル〕の主張(pamphlet)は高い尊厳を獲得することができなかつた¹¹。

では、アハッド・ハアムはシオニズムとユダヤ教をどのように結びつけたのか。アハッド・ハアムの父親はハシディズムを信奉していたため、彼は幼少期に伝統的なユダヤ的教育を受けて育った。しかし、16歳を迎えるまでに、彼はハシディズムに疑問を持ち、次第にマスキリーム(世俗主義者)へと転向していった。

次に取り上げる論文、“The Jewish State and The Jewish Problem”(1897)は、アハッド・ハアムの「ユダヤ教」理解が端的に現れている箇所の一つである。

この目的〔歴史的な中心に帰還するという希求¹²〕のために、ユダヤ教(Judaism)は現在のところわずかに必要とされる。〔…〕このユダヤ人の入植は徐々に発展するものであり、〔…〕この中心部から、ユダヤ教の精神は、大きな円周に、ディアスポラのすべての共同体にゆきわたり、彼らに新しい生命を宿らせ、彼らの一体性(unity)を保つものとなるだろう¹³。

上述の引用箇所では、アハッド・ハアムはユダヤ教の存在が実際のパレスチナへの入植に果たす役割は限定的であるとしながらも、その「歴史的な中心」に帰還することにより、そこから「ユダヤ教の精神」が発信されることによって、ディアスポラのユダヤ人たちの統合がもたらされると主張している。ディアスポラのユダヤ人たちに新たなアイデンティティを付与するものとして「ユダヤ教(Judaism)」が機能することを唱っている。このようにアハッド・ハアムは“Judaism”について述べているが、ダビッド・ノヴァク(David Novak)は、アハッド・ハアムのユダヤ教理解について、“Judaism”よりも、むしろ“Jewishness”と呼ぶ方が、今日われわれが理解する上では望ましいと提案している¹⁴。

以上のことから、文化的シオニズムにとって、精神的センターとしてパレスチナの地がユダヤ人のアイデンティティ存続のために必要不可欠であるという理由が示された。では、アハッド・ハアムにとって、「文化」とは何であったのか。

2-2. アハッド・ハアムにとっての文化

アハッド・ハアムは「客観的に国家の文化は、いずれの時代もその存在において、民族の最良の精神を体現するものである」¹⁵と理解している¹⁶。しかし、ヘブライ文化に関しては、シオニストの間でようやく現実味を帯びるようになったと位置づけている。アハッド・ハアムはヘブライ文化について「聖書(the Scriptures)の外にヘブライ文化というものは存在しない。[それは]ユダヤ人が自らの土地で日常生活を営んでいた時に作り出したものである」¹⁷と位置づけている。そのため、アハッド・ハアムはユダヤ人がかつて日常生活を営んでいた場所にヘブライ文化の中心を据える必要性を説いた。

私の考えでは、物理的な入植が〔シオニズム〕全体の要かということ、実際に入植するかどうかということはそれほど重要ではない。むしろ、現実的で確固とした民族的要求の応答として、民族の精神的センター(national spiritual center)が我々の父祖の地(our ancestral country)で創出されるかどうかである¹⁸。

このように、アハッド・ハアムはヘブライ文化の発信地として、父祖の地の必要性を説いた。ここまで文化的シオニズムの特徴を概観してきた。次章では、アハッド・ハアムのシオニズム観が、1900年から1920年代に至るアメリカ・ユダヤ社会において影響力を有していた三名の人物へどのように受容されたのかを瞥見する。

3. アメリカ・シオニストのアハッド・ハアム受容

グラス(Glass)が指摘するように、アメリカのユダヤ人たちは宗教的な相違、イデオロギー上の見解の違い、異なる出身地などによって細かく分節化しており、アメリカからパレスチナへ移住することに関しては、様々な見解が乱立していた。アメリカ・ユダヤ人社会の中で少数派とされたシオニストらにとっても、彼らの関心は自らパレスチナへ入植するというものではなかった。むしろ、彼らの関心はアメリカでのユダヤ人の将来的な状況に向けられていた¹⁹。本稿で取り扱うマグネス、カプラン、カレンの中でも、実際にイスラエル建国以前のパレスチナの地へ渡った人物は、マグネスのみである。シオニズム運動に携わったアメリカ系ユダヤ人の指導的立場にいた人物のうち、マグネスやヘンリエッタ・ソルド(Henrietta Szold, 1860-1945)を除いては、パレスチナに移住する者はいなかった²⁰。

本章の第1節では、まずアハッド・ハアムのシオニズム観に影響を受けた人物、ユダ・L・マグネスを取り上げる。

3-1. ユダ・L・マグネスにとってのシオニズムとユダヤ教²¹

ユダ・L・マグネス(Judah L. Magnes, 1877-1948)は1877年、アメリカのサンフランシスコで生まれた。改革派に影響を受けた両親のもとで育ち、彼自身もまた改革派のラビとなる²²。また、3年間のドイツ留学中に、ハイデルベルグ大学で哲学博士の学位を取得した。マグネスにとって最初のシオニズム運動との関わりは、1902年12月、ドイツに留学中のことであった。彼は当時、ドイツのユダヤ人社会の中で興隆しつつあったユダヤ民族主義に触れ、ベルリンのユダヤ・カレッジの民族学生協会(National Association of Students)の設立に関与した。帰国後は、1903年にシンシナティで教鞭を執り、司書として勤務したのち、1906年から1910年にかけては、ニューヨークへ渡り、テンプル・エマニュエル・シナゴグのラビを務めた。一方、シオニストとしての彼の活動は1905年から1908年にかけて全米規模の初のシオニスト組織であったアメリカ・シオニスト連盟(Federation of American Zionists, FAZ, 1898年設立)の名誉秘書を務めている。1922年にパレスチナに移住し、ヘブライ大学初代総長としても知られる人物である。

マグネスは、後に取り上げる、カプランやカレンと比べると、思想家というよりは、活動家としての側面が強い。実際、マグネスはエルサレムから、1925年4月にテルアビブのアハッド・ハアムに宛てて手紙を記している。

[...] 私はもう何年も感じていたように、[今、こう思います。ヘブライ] 大学設立の案はユダヤ教(Judaism)の発展において極めて重要なものです²³。

このマグネスの記述はアハッド・ハアムの提唱したパレスチナに精神的なセンターを築く理念を端的に示すものである。マグネスはアハッド・ハアムの理念を如実に体現した人物と解釈することも可能である。

また、マグネスは、1909年のテンプル・エマニュエル・シナゴグでの説教で、「シオンは礎石であり、構造全体の要石です。また、アメリカのユダヤ教を最大限に保ち、発展させることは、私たちの義務であり、私たちの特権です」と述べている²⁴。このように、マグネスはディアスポラ〔彼の場合はアメリカの地〕で活力のあるユダヤ文化を打ち立てる重要性を唱えていた。マグネス自身は、1922年にパレスチナへ渡っているが、その理由は、ディアスポラの否定ではなく、あくまでも、ヘブライ大学の総長を務める等の職務によるものであった。むしろ、マグネスは、アメリカ社会に同化していくなかで、ユダヤ・アイデンティティを破棄することに危機感を抱いていた。そして、ユダヤ教を通して、そのアイデンティティを存続していくことを目標に掲げていた。マグネスは、「もしニューヨークに戻るのならば」と題した覚書 b)と c)の中で次のように述べている。

b) 学校の創設—近代的な機関でありながら、同時にユダヤの核であるトーラー〔の教授〕をも含めたもの。批判的な洞察とユダヤの畏敬の念、美、信心深さをもあわせもつもの。〔…〕望むならば、非ユダヤ人も通学することが可能であるが、おそらく彼らはそれを望まないだろう。

c) ケヒラー（ユダヤ人共同体）²⁵は、**Jewish Communal Council**（あるいは、それと似たような名称）に変更するべきである。〔…〕その目的の一つは、アメリカの生活の必要性に対応できるケヒラーの創出を助けるものとなるだろう。ケヒラーの概念は価値があるもので、失うにはあまりにも惜しい。ケヒラーを創造〔再構築〕し、さらにユダヤ教(Judaism)の主張を手助けする方法と手段は、ユダヤ人の問題の開かれた議論の場を設け、ユダヤ人のすべてのグループが集結することにある²⁶。（下線部分は引用者による）

上述の引用から明らかなように、マグネスにとっては、世俗の科目を学ぶ教育機関の創設を主張しつつも、その教育のベースにはユダヤ教の教え（トーラーの教え）に基づいた教育機関をアメリカに建設することを望んでいたことが確認できる。また下線で示したとおり、時代の要請とアメリカ社会に適した形にケヒラーの概念を捉え直すことで、ユダヤ・アイデンティティの存続を図ろうと望んでいたことが明らかである。

マグネスのユダヤ教観に関する具体的な例は、次節のモルデカイ・M・カプランの事例の中で取り上げる。また、次節ではカプランが文化とユダヤ教についていかに理解していたかを概観する。

3-2. モルデカイ・M・カプランにおける文化とユダヤ教

モルデカイ・M・カプラン(Mordecai M. Kaplan, 1881-1983)は、近代的な生活にユダヤ教が適応することを模索し、「再建派(Reconstructionism)」という運動を創始したことで知られている。

リトアニア出身の彼は、9歳の時にアメリカへ移住した。正統派のラビであった父からユダヤ教の教えを学んだ後、コロンビア大学で社会学と哲学を修め、ユダヤ教神学校(JTS)で修士号を取得した。カプランが影響を受けたのは、ドイツで宗教的シオニズムを提唱したラビ・ライネス(Rabbi Yitzchak Yaakov Reines, 1839-1915)であった。カプランはラビ・ライネスのもとで叙任を受けている²⁷。カプランの関心事は、近代的生活に適したユダヤ教を求め、既存のユダヤ教を改革するところにあった。

1910年代のアメリカにはすでに、正統派、改革派、保守派といった三つのグルー

ブが形成されていた。しかし、カプランにとってみれば、正統派も改革派も魅力的なものとして映らなかった。そればかりでなく、彼にとっては、保守派に対しても時代の要請に十分に応えられているようには見えなかった。保守派は正統派と改革派の間の立場を取り、極端な改革運動に対しては歯止めをかけ、伝統を重んじること、しかしそれは単に過去に回帰するものではないという立場を目指すグループであった。しかし、カプランは保守派にも満足することはなかった。「再建派」というグループが実際に確立されるのは1968年以降であるが、すでに1928年の時点では「再建派」のもととなる理念は構築されていた²⁸。その理念は、カプランの代表的著作である *Judaism as a Civilization* (1934)の中に顕著に見出される。以下に引用する文章は、カプランがユダヤ教を新たに構築する必要性を訴えている箇所である。

他の—この世での—贖い、それはかつて社会的遺産に対するユダヤ人の忠誠を喚起させたものでありますが、それに対する唯一且つ適切な代替物は、創造的なユダヤ教(a creative Judaism)です。これは、ユダヤ教が、彼の内にある最高のものを彼から得るために再構築(re-constructed)されなければならないことを意味しています。彼の精神的な地平線を広げ、同情を深め、希望を抱かせ、彼がそこに住んでいたために世界をより良くすることを可能にするように整えられなければなりません²⁹。

レーネ・コーゲル(Renee Kogel)とゼヴ・カツツ(Zev Katz)共編による、*Judaism in a Secular Age: An Anthology of Secular Humanistic Jewish Thought*の中で指摘されているように、カプランもまたアハッド・ハアムから影響を受けている³⁰。カプラン自身、当初はアハッド・ハアムからの影響を認めていなかったが、後年、彼はアハッド・ハアムからの影響を少なからず認めている³¹。

アハッド・ハアムは、私にユダヤ教(Judaism)の比重をその神学的なものから、民族意識(peoplehood)的なものに変えさせた³²。

そして、ノアム・ピアンコ(Noam Pianko)が指摘しているように、カプランがアハッド・ハアムのパレスチナをユダヤ人の精神的センターとする理念を演繹し、アメリカでのユダヤ人の文明の着想を得た³³。

とはいえ、カプランがアハッド・ハアムを全面的に受容し、肯定していたわけではない。アハッド・ハアムとカプランが異なる点は“Judaism”の捉え方の相違である。アハッド・ハアムは必ずしも宗教として“Judaism”を捉えていたわけではな

かった³⁴。それに対してカプランは、「ユダヤ教(Judaism)」を a “religious civilization” と捉えた。そして彼はユダヤ教の立場から、アメリカ・ユダヤ人のアイデンティティの再構築を試みた³⁵。

また、カプランの「宗教」としてのユダヤ教の捉え方が、文化的シオニズムに影響を受けた他のアメリカ・シオニストと共有されたものだったかといえば、必ずしもそうではなかった。前節で取り上げたマグネスは別の見方を有していた。

以下に引用するのは、マグネスが 1921 年 1 月 14 日付でカプランに宛てた書簡である。この書簡は、カプランがマグネスに渡したパンフレット“The Society of the Jewish Renaissance” (*The Maccabaeans*, November, 1920 に再録)³⁶に対するコメントである。マグネスは、コメントする際に 12 項目に分けて自身の見解を簡潔に述べている。その第 3 項目はこうである。

しかしながら、シナゴグの改革として、[あなたが行っている] ユダヤ・ルネサンス協会(The Society of the Jewish Renaissance)の活動について、[私からすると] シナゴグで用いている「宗教的」な意味として捉えられるようには見受けられません。あなたのパンフレットの綱領 2 の中で言及されている神への信仰については、神の宗教的な顕現というよりは、社会的な観点から神について言及している [ように見受けられます]³⁷。

マグネスにとっては、カプランのユダヤ教の捉え方が、もはや宗教的なものとしての「ユダヤ教」ではないように感じていた様子が上記の引用からうかがえる。つまり、この引用箇所から少なくとも、カプランのユダヤ教の改革およびユダヤ教の信仰はマグネスにとって無批判に賛同できるものではないことがわかる。このように、カプランの立場は必ずしも同時代を生きた他のアメリカ・文化的シオニストの中においてさえ共有されるものではなかった。しかし、カプラン自身はユダヤの宗教(the Jewish religion)の立場からシオニズムを唱えていたことが次の引用から確認できる³⁸。

宗教的にユダヤ人になるということは、ユダヤ人の潜在能力を顕わにする上で、道徳的かつ精神的な至高に達することができるように進むことを意味する。[...] ユダヤ人の現在の地位 [一疎外され、断片化した個体の集団―] から有機的な結合体にまで高めるためには、ユダヤ人全体の一体性、あるいはユダヤ人を構成する条件を創造すること、油と芯が炎になるごとく、組織されたユダヤ人の生活というのはユダヤ教の宗教(Jewish religion)そのものです³⁹。(直線と波線の下線部分はともに引用者による)

直線で示された箇所は、アハッド・ハアムの「ユダヤ教の精神は、彼らの一体性を保つものとなる」という考えと類似している⁴⁰。また、波線で示した箇所は、先に引用したマグネスの「カプランの言及は宗教的ではない」とする見解に対して、カプランのユダヤ教の捉え方がわかる箇所である。マグネスが指摘したところの「宗教としてのユダヤ教」観をカプランは共有していなかったことが確認できる。カプラン自身の言葉にあるように、彼はユダヤ教的生活を営むことでユダヤの一体性を保とうとしていたことがわかる。

以上の引用を整理すると、まず、カプランとアハッド・ハアムはユダヤの一体性を保つうえで、「ユダヤ教」の果たす役割の比重が異なることが明らかとなった。また、マグネスとカプランに関しては、同じアハッド・ハアムの影響を受けつつも、ユダヤ教の捉え方に関しては大きく異なっていたことが示された。

3-3. ホレス・M・カレンにとってのヘブライズム

本節では、アハッド・ハアムからの影響を受けたもう一人のアメリカ・シオニスト、ユダヤ系哲学者として名を馳せたホレス・M・カレン(Horace M. Kallen, 1882-1974)の「ヘブライズム」の捉え方に着目し、アハッド・ハアムとの比較を行なう。先に取り上げた、マグネス、カプランが「ユダヤ教」との関わりの中でシオニズムを捉えていたことに対し、カレンは、「ヘブライズム」という用語を用いることで彼のシオニズム観を語っている。

カレンは、イスラエル・ザンクヴィル(Israel Zangwill)の戯曲『メルティングポット』(1908年)で取り上げられた「人種のるつぼ」論に対して、文化多元主義を提唱したことで有名な人物である⁴¹。彼は、1882年にシレジア⁴²のベルンシュタットで生まれた。1887年に父親の仕事のため、ボストンへ移住している。彼の父親は正統派のラビであった。しかし、カレンにとっては1917年に父親が亡くなった後も、正統派は魅力的なものではなかった。同様にアメリカの改革派のラビに対しても、ユダヤ人が直面しているアイデンティティ存続の危機に対して何も対応できていないと感じていた⁴³。彼は1908年にハーヴァード大学で博士号を取得した後、学者の道を歩むことになる。

1910年代までのアメリカは「人種のるつぼ」論が盛んに主張されていた時期である。カレンは1924年まで“cultural pluralism”という用語は使用しなかったけれども⁴⁴、彼にとって、アメリカ社会のなかで「それぞれの出自が溶け合って一つのものになる」というザンクヴィルの「人種のるつぼ」論は到底受け入れられるものではなかった⁴⁵。「人種のるつぼ」論では、ユダヤ性なるものも溶解してしまうためである。カレンはアメリカ社会でユダヤ性を保持するためにシオニズム思想に接近した。しかし、カレンはユダヤ性という言葉ではなく、「ヘブライの精神」

という用語を好んで用いている⁴⁶。

歴史的にユダヤ人の文化は、単に宗教(religion)としてのみ現れるものではない。[…] それは別の名称や異なる価値判断を受け取る。それ〔ユダヤ人の文化〕は、ユダヤ教(Judaism)というよりは、ヘブライズム(Hebraism)と呼ばれる。そして、ヘブライズムの恋人⁴⁷になるということは、ユダヤ教徒(Judaist)になること以上のものである⁴⁸。

カレンは、“Democracy versus Melting Pot”と題した論考の中で、「服は着替えられる〔…しかし〕彼らの父祖は変えられない」⁴⁹と述べている。これは、るつぼの中で溶け合い、ひとつの新しい人間を形成することを可能とする主張に対する批判である。これを先に引用した、「歴史的にユダヤ人の文化は、単に宗教(religion)としてのみ現れるものではない。[…] それは別の名称や異なる価値判断を受け取る」というカレンの1910年の見解に当てはめて考えると以下のようなになる。ユダヤ教やユダヤ人の生き方に当てはめると、カレンの解釈では、ユダヤ教の形態、あるいは日々の生活の営みは変えることが可能であるが、自らのルーツを変更することができない、と考えられる。

また、アハッド・ハムとの比較に関して取り上げるならば、この新しいユダヤ人のアイデンティティ理解として、カレンがヘブライズムという用語を用いている点は、アハッド・ハムが聖書に基づいたヘブライ文化を提唱したことと非常に類似している。アハッド・ハムは、ユダヤ教の再生にあたり、ヘブライ語の重要性を主張していた。「パレスチナで完全なヘブライ語教育を受け、これが民族教育の標準的なタイプとならなければ、我々は安らぎを得ることは難しい」⁵⁰と主張している。つまり、アハッド・ハムは、ユダヤ人にとって、ヘブライ語を用いて生活すること、あるいはヘブライ語で物事を考えるということが、アイデンティティのよりどころとなり、重要な要素であると考えていた。

カレンは、1910年の論文の中で、「私はシオニストである。私はユダヤ人(the Jews)の統合と再建を目指している」⁵¹と述べている。カレンとアハッド・ハムの違いについて以下のことが指摘できる。アハッド・ハムがユダヤ人の再建の場所をパレスチナの地を中心として、ディアスポラ社会のユダヤ人共同体の精神的支柱が築かれると主張したのに対し、カレンにとっては、それがパレスチナの地というよりも、むしろアメリカの地を意味していたことにある。

4. おわりに

以上、マグネス、カプラン、カレンといった三名の人物のシオニズム観に対するアハッド・ハアムの影響を概観することで、文化的シオニズムのアメリカ化のいくつかの特徴を提示した。マグネス、カプラン、カレンに共通するのは、幼少時にユダヤ教の教育を経験したことである。マグネスに関しては、アメリカの改革派ユダヤ教の影響を受けた両親のもとで育ったため、カプランとカレンの幼少時の正統派ユダヤ教に基づいた教育の授受とは少し状況が異なる。けれどもマグネスは父方がハシディズムの家系であったために、アメリカにおける改革派という一つの「ユダヤ教」以外の他のユダヤ教世界を知る機会に恵まれていた。カレンは伝統的なユダヤ教の実践に対して興味を抱くことはなかったが、「ヘブライズム」という新たなアイデンティティをシオニズムの中に見出し、ユダヤ性を捨て去ることなく、アメリカで生活を営んでいくことを考えた。文化多元主義を主張したカレンにとっては、そのナショナル・アイデンティティを強めるシオニズム思想は批判の対象とはならなかった。

本稿では、マグネスとカプランの「ユダヤ教」理解の立場が異なっている点をマグネスがカプランに宛てた書簡から確認した。また、カレンの場合は、シオニズムを実践することがいわばユダヤ教の捉えなおしとして考えたのではなく、むしろ、ユダヤ教ではなく、「ユダヤ性」の存続に関心を持ち、シオニズム運動へと接近していった。以上のように、三者のユダヤ教の捉え方、あるいはユダヤ教との関わり方はそれぞれ異なるものであった。しかし、三者は、同時代のアメリカ・ユダヤ人共同体の再生に関心を共有していたと言える。

1900年代から1920年代に至る時代の特徴として、アメリカ・ユダヤ人社会の在り方の変化が挙げられる。つまり、ユダヤ教の在り方やユダヤ・アイデンティティそのものの変容を迫られる状況下のなかで、マグネス、カプラン、カレンはシオニズム思想の中にアメリカ・ユダヤ人共同体の存続の糸口を見いだそうと試みた。三者のシオニズムへの接近は、アメリカ社会でユダヤ性を失わずに生きていこうとした取り組みであった。彼らは文化的シオニズムをアメリカ化することで、ユダヤ・アイデンティティの維持に努めようとしたのである。

本稿では、1900年代から1920年代におけるアメリカ・ユダヤ人社会の多様化に対し、シオニズム運動の中にアイデンティティ存続の光を見出そうとした試みを明らかにするための予備的考察として、上記三名のそれぞれにおけるアハッド・ハアムからの影響とその後の思想的発展に関する特徴を取り上げた。本稿では文化的シオニズムのアメリカ化の特徴を描くことを目的としたため、それぞれにおけるシオニズム思想の変遷について詳細に検討することができなかった。また文化的シオニズムのアメリカ化の過程を、他のシオニズムの特徴を有するアメ

リカ・シオニストや非シオニストとの関わりの中で論ずる必要性もあるが、それらは今後の課題とし、個別に考察していくことにする。

註

* 訳文中および引用箇所執筆による補足は亀甲括弧〔 〕で示した。

* 本稿は、JSPS 科研費 JP17H07235 の助成を受けて行った研究成果の一部である。

- ¹ 1900年代から1920年代に限らず、アメリカへ移民したユダヤ人による「ユダヤ教」のアメリカ化への試みは、絶えず取り組まれてきた。ユダヤ教のアメリカ化が顕著に現れた場所の一つにシナゴグの機能があげられる。例えば、植民地時代のユダヤ人移民にとってシナゴグは、典礼と儀式を通して親しみと慰めをもたらしてくれる場であり、家族に必要とされる物心両面のサポートが提供されたことで、同胞ユダヤ人の安全が保障される場として機能していた。しかし、カープ(Karp)が指摘するように、「宗教が多文化化した社会において、シナゴグは宗教的な景観の一部となり、その〔多文化主義的な傾向を受け入れた〕支持者たちはホスト社会に受け入れられる一貫性のあるアイデンティティを身につけた」と述べている。Abraham J. Karp, “Overview: The Synagogue in America—A Historical Typology,” in *The American Synagogue: A Sanctuary Transformed*, Jack Wertheimer (ed.) (Cambridge University Press, 1987), p. 3. カープの指摘が意味することは、ユダヤ・アイデンティティの維持のために、シナゴグは一定の有効性をもっていたが、ホスト社会の形態に変容させることでユダヤ・アイデンティティを存続させたと解釈できる。Eric L. Friedland, “Hebrew Liturgical Creativity in Nineteenth-Century America,” in *Modern Judaism*, Vol. 1 (1981), pp. 323-336.
- ² 反ユダヤ主義を理由に、19世紀になると、ドイツ、ボヘミア、ハンガリーなどからドイツ系ユダヤ人がアメリカへ移民することになる。その数は、1820年から70年にかけて、およそ20万人が流入し、1880年の時点で、アメリカにおけるユダヤ人の数は25万人に上った。彼らは西部開拓に伴う経済向上の波に乗り、中産階級化を成し遂げた。北美幸『半開きの＜黄金の扉＞アメリカ・ユダヤ人と高等教育』（法政大学出版局、2009年）、11頁。
- ³ 東欧系ユダヤ人における正統派のラビの中には、アメリカへの移民として渡ることを拒絶する者もいた。そのため、東欧系のユダヤ人たちは一般的に宗教的であったとされているが、指導者層に空白が生じることを恐れる者たちもいた。Jonathan D. Sarna, *American Judaism: A History* (Yale University Press, 2004), p. 154. 東欧系ですら一枚岩ではなかった。例えば、朝の礼拝後に学習するために集まるか、夕方の礼拝後にその日のタルムードの箇所を学習するかといった事柄について、見解が分かれていた。*Ibid.*, p. 157. 当時のアメリカにおけるユダヤ社会では、信仰生活からの乖離による精神的危機に加え、宗教生活の崩壊とコミュニティを統制する者が不在であるという状況下のもと、例えば、「コーシャー肉騒動」に代表されるような詐欺の事例が増加するという事

- 態に陥っていた。*Ibid.*, pp. 162-163.
- ⁴ アメリカにおける二つの共同体（「ドイツ系」および「東欧系」）の断絶とそれぞれのユダヤ教の精神的危機に対する対応に関しては以下の文献が詳しい。*Ibid.*, pp. 135-207. とりわけ以下を参照。*Ibid.*, pp. 151-165; Eitan P. Fishbane and Jonathan D. Sarna (eds.) *Jewish Renaissance and Revival in America* (Brandeis University Press, 2011).
- ⁵ Jonathan D. Sarna, “The Great American Jewish Awakening,” in *Midstream: A Monthly Jewish Review*, Vol. XXVIII, No. 8 (October, 1982), pp. 30-34.
- ⁶ 本名はアシェル・ギンツベルグ(Asher Ginzberg)で知られているが、彼のペンネームであるアハッド・ハアムが「人民の一人」を意味するように、アハッド・ハアムは近代化・世俗化に伴い、解体していく「ユダヤ教」の精神性をもう一度新たに形作ろうと試みた人物である。ノヴァクによると、「アハッド・ハアム」というフレーズは、創世記 26:10 に出てくると指摘されている。しかし、この表現は、サムエル記上 26:15 の箇所にもみられる。ところが、ノヴァクは創世記 26 章以外の箇所には言及していない。サムエル記上が五書ではないためだろうか。David Novak, *Zionism and Judaism: A New Theory* (Cambridge University Press, 2015), p. 66, n. 32; Hans Kohn, “Introduction,” in *Nationalism and the Jewish Ethic: Basic Writings of Ahad Ha'am*, Hans Kohn (ed.) (Herzl Press, 1962), pp. 7-33. ツィッパースタイン(Zipperstein)も、「アハッド・ハアム」の表現が五書では創世記 26 章に一カ所のみ現れると指摘しているが、サムエル記上に関して言及はしていない。Steven J. Zipperstein, “Symbolic Politics, Religion, and the Emergence of Ahad Haam,” in *Zionism and Religion*, Shmuel Almog, Jehuda Reinharz and Anita Shapira (eds.) (Brandeis University Press, 1998), p. 61.
- ⁷ 本稿では、「ヘルツル」と記載しているが、引用文献中に出てくる場合はその限りではない。訳文通り、「ヘルツェル」と表記している。煩雑さを避けるために、以下、断りなくこの基準で表記する。
- ⁸ サイモン・ノベック『20世紀のユダヤ思想家』鶴沼秀夫（訳）（ミルトス、1996年）、25頁。
- ⁹ ノベック、同上、47頁。
- ¹⁰ アハッド・ハアムのヘルツル批判に関しては、以下の論文参照。Yossi Goldstein, “Eastern Jews vs. Western Jews: the Ahad Ha'am—Herzl dispute and its cultural and social implications,” in *Jewish History* (2010) 24, pp. 355-377. ゴールドシュタイン(Goldstein)は、アハッド・ハアムのヘルツル批判は、ヘルツルが西欧的文化圏の立場を表明し、それがアハッド・ハアムの東欧の立場とは相容れなかったと結論付けている。つまり、ヘルツルは同胞ユダヤ人救済のために、その移住先にウガンダ案を候補に入れていたが、アハッド・ハアムの立場からすると、ウガンダ案は考慮には入らない。つまり、民族(nation)の再生には、土地〔この場合、エレット・イスラエルとユダヤ人から伝統的に呼ばれてきたパレスチナの場所を指している〕の代替案は考えられなかった。*Ibid.*, pp. 369-371.
- ¹¹ Ahad Ha'am, “Pinsker and Political Zionism,” (1902) in *Nationalism and The Jewish Ethic: Basic Writings of Ahad Ha'am*, Hans Kohn (ed.) (Herzl Press, 1962), pp. 122-123.

- ¹² アハッド・ハアムはこの引用箇所少し前で、“its historic centre”という表現を用いている。
- ¹³ Ahad Ha'am, “Jewish State and Jewish Problem,” in *Nationalism and The Jewish Ethic*, pp. 78-79.
- ¹⁴ Novak, *op.cit.*, p. 68.
- ¹⁵ Ahad Ha'am, “The Spiritual Revival (1902),” in *Selected Essays*, Leon Simon (trans.) (The Jewish Publication Society, 1912), p. 259.
- ¹⁶ ちなみにノバク(Novak)はアハッド・ハアムの「文化」の捉え方を次のように独自に説明している。「文化を宗教の表出とみなすのではなく(すべての文化(all culture)とカルト(cult)が同じラテン語の語根に由来している)、ほとんどの文化的ユダヤ人はそこで両者の完全な分離を望んでいる」とし(Novak, *op. cit.*, p. 79)、「宗教的に根付いたすべての文化が、暫定的かつ驚異的な文化の定義をうまく果たしているにもかかわらず、これをアハド・ハアムは確かに拒絶した」と解釈している(David, *op. cit.*, p. 80)。
- ¹⁷ Ahad Ha'am, “The Spiritual Revival (1902),” in *Selected Essays*, p. 262.
- ¹⁸ *Ibid.*, p. 288.
- ¹⁹ Joseph B. Grass, *From New Zion to Old Zion: American Jewish Immigration and Settlement in Palestine, 1917-1939* (Wayne State University Press, 2002), p. 37.
- ²⁰ ブラウン(Brown)は、マグネス、ソルドに加えて、ゴルダ・メイア(Golda Meir)を挙げている。Michael Brown, *The Israeli-American Connection: Its Roots in the Yishuv, 1914-1945* (Wayne State University Press, 1996), p. 133.
- ²¹ ディアスポラのユダヤ人社会の絆を強化するためにパレスチナの地が重要であるというマグネスの主張と、アハッド・ハアムの関係に関しては以下の拙論で簡単に触れている。大岩根安里「J・L・マグネスとH・ソルドのシオニズムにみる『共生』—“the Internal Jewish Question”と“the Arab Question”を巡って—」『一神教世界6』(2015年3月)、19-36頁。
- ²² マグネスの父方はポーランドのハシディズムの家系であった。しかし彼の父親は、帝政ロシアに対するポーランドの反乱時に、アメリカへと渡り、その後、アメリカの改革派ユダヤ教を実践していくことになる。Daniel P. Kotzin, *Judah L. Magnes: An American Jewish Nonconformist* (Syracuse University Press, 2010), pp. 11-16, 41.
- ²³ Letter from Judah L. Magnes to A [had] H[a'am], in Arthur A. Goren (ed.) *Dissenter In Zion: From the Writings of Judah L. Magnes* (Harvard University Press, 1982), pp. 234-235.
- ²⁴ Judah L. Magnes, “The Melting Pot,” Sermon Delivered at Temple Emanuel (New York, October, 9, 1909), in Goren, *Ibid.*, pp. 101-106.
- ²⁵ ケヒラー(Kehillah)とは、ユダヤ人共同体(a Jewish Community)を指す。元来は、広くユダヤ人共同体を指す用語として用いられてきたが、中世後期より、単にユダヤ人の共同体全体を指す用語ではなく、シナゴグの構成員を指す用語として、より宗教的な意味合いで用いられるようになる。Geoffrey Wigoder, *The Encyclopedia of Judaism* (Macmillan Publishing Company, 1989), p. 409.
- ²⁶ Judah L. Magnes, “40, Journal: If I Went Back to New York,” (Jerusalem, May 3, 1923) in Goren, *op. cit.*, p. 207.

- ²⁷ Renee Kogel and Zev Katz, *Judaism in a Secular Age: An Anthology of Secular Humanistic Jewish Thought* (KTAV Publishing House, 1995), pp. 32-40; Dan Cohn-Sherbok, *Fifty Key Jewish Thinkers*, Second edition (Routledge, 2007 [1997]), pp. 119-124; Alan T. Levenson, *An Introduction to Modern Jewish Thinkers: from Spinoza to Solovetchik* (Rowman & Littlefield Publishers, 2006), pp. 133-158; イーラ・アイゼンシュタイン「モルデカイ・M・カプラン」『二十世紀のユダヤ思想家』サイモン・ノバック（編）鶴沼秀夫（訳）（ミルトス、1996年）、309-341頁；市川裕『ユダヤ教の歴史』（山川出版社、2009年）、223-224頁。
- ²⁸ アイゼンシュタイン、前掲書、317頁。
- ²⁹ Mordecai M. Kaplan, *Judaism as a Civilization: Toward a Reconstruction of American-Jewish Life* (Thomas Yoseloff, 1934), p. 511.
- ³⁰ Kogel and Katz, *op. cit.*, p. 33. また、コーゲル(Kogel)とカツツ(Katz)の前掲書の中では、カプランの「文明としてのユダヤ教(Judaism)」という概念は、アハッド・ハアムの他にシモン・ドゥブノフからも着想を得たと位置づけている。その他、アラン(Alan)も同様の見解を示している。Alan, *op. cit.*, p. 135.
- ³¹ アハッド・ハアムからの影響に関するカプランの認識については以下の論文を参照。Meir Ben-Horin, “Ahad Ha-am in Kaplan: Roads Crossing and Parting,” in *The American Judaism of Mordecai M. Kaplan*, Emanuel Goldsmith, Mel Scult and Robert Seltzer (eds.) (The New York University Press, 1992), pp. 221-231.
- ³² Mordecai M. Kaplan, “Reconstructionism in Brief,” in *Jewish Spectator*, Vol, 31, No. 2 (September, 1966), p. 10.
- ³³ ピアノコ(Pianko)は現代ユダヤ思想、とりわけドイツとアメリカにおけるユダヤ・ナショナリズムとシオニズムの研究者である。Noam Pianko, *Zionism and the Roads Not Taken: Rawidowicz, Kaplan, Kohn* (Indiana University Press, 2010), pp. 203-204.
- ³⁴ 本稿、2-1 参照。
- ³⁵ Levenson, *op. cit.*, p. 136.
- ³⁶ 同ソサエティは短期間の活動であった。その代わりにカプランは1922年にThe Society for the Advancement of Judaism という協会を立ち上げている。Goren, *op. cit.*, pp. 193-195.
- ³⁷ *Ibid.*
- ³⁸ Mordecai M. Kaplan, *Judaism as a Civilization: Toward a Reconstruction of American-Jewish Life* (Thomas Yoseloff, 1934), p. 328.
- ³⁹ *Ibid.*, pp. 328-329.
- ⁴⁰ 本稿、脚注10の引用箇所を参照。
- ⁴¹ Daniel Greene, “A Chosen People in a Pluralist Nation: Horace Kallen and the Jewish-American Experience,” in *Religion and American Culture: A Journal of Interpretation*, Vol. 16, No. 2 (Summer, 2006), p. 161.
- ⁴² 現在のポーランド南西部一帯とチェコ北東部にまたがる地域。
- ⁴³ Greene, “A Chosen People in a Pluralist Nation,” p. 165.
- ⁴⁴ Daniel Greene, *The Jewish Origins of Cultural Pluralism: The Menorah Association and American Diversity* (Indiana University Press, 2011), p. 64.
- ⁴⁵ 北が指摘するように、ホレス・カレンが文化多元主義者であると同時にシオニストであったこと、また1920年代のユダヤ人大学設立の支持者であったことは、アメリカ社

会でのユダヤ性の保持という点で矛盾するものではなかった。以下、引用。「〔ブランダイス大学創設の〕賛同者となった哲学者ホレス・カレンもシオニストであった。カレンに関していえば、1920年代のユダヤ人大学設立議論にみられた『るつぼとしてのアメリカ』の対極にあるモデルである文化多元主義を、すでに1910年代に提示した人物でもあった。そうするとここに、ユダヤ人の独自性を強調するものとしてのユダヤ人大学設立の支持と文化多元主義の支持、そして、ユダヤ人大学設立への反対と同化主義の支持のそれぞれが結びつくという、二つの流れが確認される。」北、前掲書、141-142頁。

⁴⁶ Horace M. Kallen, “Nationality and the Jewish Stake in the Great War,” in *Menorah Journal* 1, No. 2 (1915), p. 113; Noam Pianko, *Zionism and the Roads Not Taken: Rawidowicz, Kaplan, Kohn* (Indiana University Press, 2010), pp. 45-46.

⁴⁷ Horace M. Kallen, “Judaism, Hebraism, Zionism,” in *The American Hebrew and Jewish Messenger* (June 24, 1910). 同論文は、現在、電子データベース上で閲覧できるが、最初の頁数（181頁）を除いて、頁数が記載されていない状態であるため、頁数は *Judaism at Bay* に記載されている頁を採用。Horace Meyer Kallen, *Judaism at Bay: Essays toward the Adjustment of Judaism to Modernity* (Bloch Publishing Company, 1932), p. 38; Kogel and Katz, *op. cit.*, pp. 169-171. なお、1910年に出版された論文では、“It is called Hebraism, not Judaism, and to be a Hebraist is more than to be a Judaist.”となっているのに対し、1932年の同一論文の中では、“a Hebraist”の箇所が“a lover of Hebraism”になっている。本稿の訳出は、1932年のものを採用している。1910年と1932年の同一論文のあいだには若干の文言の相違が見られる。筆者はこの相違に重要性を見出しているものの、本稿の目的から逸れるため、このことに関する詳細な分析は別の稿で検討したい。

⁴⁸ Kallen, *Ibid.*, p. 38. カレンの「ヘブライズム」に関しては、以下の文献も参照。Greene, *The Jewish Origins of Cultural Pluralism*, pp. 33-34.

⁴⁹ Horace M. Kallen, “Democracy versus the Melting Pot: A Study of American Nationality,” in *The Nation* 100 (Feb. 18 and 25, 1915), p. 218.

⁵⁰ Ahad Ha'am, “Summa Summarum (1912),” in *Nationalism and The Jewish Ethic*, p. 152.

⁵¹ Kallen, *Judaism at Bay*, p. 32; Greene, “A Chosen People in a Pluralist Nation,” p. 171, p. 189, n. 49.